ミオヤの光

本有の巻

1、宇宙と人生
2、獨尊
3、本尊觀
4、明治天皇の御製
5、孔夫子の天道
6、教祖釋迦牟尼
7、信仰の本尊
8、統攝
9、一切知と一切能
10、人爲則と自然法
11、因縁と因果
12、衆生法と佛法
13、大小上下の統制
14、法爾の理
15、大法統攝
16、義務と權利
17、歸趣
18、子は親に歸る
19、伏能と其開發
20、手段と目的
21、親が子を養育の目的
22、大靈の目的と衆生の向上
23、涅槃
24、有餘涅槃と無餘涅槃
25、選擇本願
26、選擇せられたるもの

世の同朋諸士に告ぐ

良に惟みるに九蒼の無窮なる之を仰げば彌々高く之を觀ずれば益々深玄。天に日月星辰は其軌を逸せずして循環し、地には四時行はれ百物生ず、宇宙の無限なる中に過去遠々未來邈々たる中に我等が生の微なる窈々冥々として自ら其の源を究め其奥を測るの智なく、天地萬物に細大となく所有萬物を統べ攝め、造化の妙用を觀ずれば之が根本となり又、其中心となり萬物の歸趣する處の本體なかるべからず。換言すれば一切萬物は何ものにか產み出され、又生育されて居るものなれば萬物の一大本源即ち一の大みおやなくてはならぬ。我等一切衆生の大本の御親は何なるものなるか、無智なる我等知ること能はざりき。然るに我等が教祖釋迦牟尼は其のもと、本有法身無量壽佛より身を分けて此世に出給ひし聖者なるが故に自ら叫んで曰く「三界は我が有なり其中の衆生は皆我が子なり」との金言は我等一切の無明の迷子等のために一道の光を與え給へり。我等は教祖の御教によりて獨りの大みおやの實在を信知することを得たり。誠に是れ喜びの極みならずや。釋尊は假に人間の身を受け給へども實には本有法身無量壽佛に在ます。我等は教祖の御教に依て大御親を信知することを得たのみでなくみおやの智慧と慈悲との光明に育まれて靈性開けて正しく父と子との最も親密なる因縁によりその光明の中に意義ある生活を遂行することを得る、實に是れ人生の最幸といふべきである。大唐の聖善導は我等と御親との間に親縁と近縁と增上縁との最も強き力を以て我等を助け給ふ所以を示されてある。我等は弱きものなれば大みおやの強き力を仰がざれば正しき道を進み行くことは出來ぬ。我等が先輩（諸々の聖者）はみな御親の光を享けて、世の爲め人の爲に偉大なる働きを以て御親の光榮を現はし熱誠に時代の人々を導きて光明の下に誘引なされた。

我等はみおやを信じ、自己は實に聖子なりとの自覺を得れば一切の人々は悉く同胞であることを信解するに至らん。

尙、世の同胞諸士に告ぐ。我等は如來の子たると共に人の子である、人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮殼が强く〳〵結び付て居る。是がために動もすれば自己を暗黑に引込れて惡道に陷れんとして居る。佛子としての聖き心は微にして却々顯れ難い。みおやの恩寵を被むり光明に靈化せられて疾く光明の下に生活し得るやうに專らみおやの恩寵を仰ぎ慈光に導かれんことを期すべきである。

みおやは清淨と歡喜と智慧と不斷との光明を以て我等が暗黑より解脫し得るの御力を與へ給ふ。人生再び逢難し一日の光陰も皆是れ御親の賜なればこの尊き光明の中に生活を得る吾人は希くは全力を竭して天分を果さんことを。

宇宙と人生

宇宙と人生との關係は先に述べた。之を宗教的に天人合一又神人一致又大我と小我との調我などとの語を以て宗教の定義を示して居る。先に宗教の主體なる人の精神を三階に別ち靈性にして大靈と合一することが出來ることは已に述べた。之よりは客體なる大靈が如何にして吾人の靈性に對して即ち小靈の爲めに如何に靈力を與へ給ふかを說く。哲學の宇宙の根本と中心と終局とを宗教には獨尊と統攝と歸趣との三義を以て大靈が吾人の爲に宗教の客體たる義を明さん。

獨尊統攝歸趣の三義。本來大靈の本體は一なれども法則を以て萬汎を統一攝理すると、勢力を以て萬物を生成養育するの兩屬性あることを明すにある。

（一）獨尊

宗教では先づ第一に宇宙に絕對無比なる唯一の獨尊の存在を信認し之に歸命信賴するを定むるにあり。是宇宙唯一の活ける大本尊である。其獨尊を信じて全力を献げて仕へ奉るのを宗教心とするのである。獨尊なる大靈は一方よりは天の法則を以て萬物を統攝する故に君王の如くに見え、一面には萬物を生成養育して終局に歸着せしむる父親に比して觀らる。之が即ち天命とも天惠とも云ふことにもなる。獨尊とは國に二の王なく天に二の日なき如くに宇宙には絕對無比の尊神は唯一人である。然るに多神教の如くに無數の神を立つるは神の本體數多くあるに非ず。例へば一日天に在て影は萬水に浮ぶが如く、水上に浮びたる光を神と見て萬物の中に神を認めて信じて行くが多神教である。又獨尊は天體に太陽が中心と爲るが如く太陽を中心として諸〻の惑星が一定の軌道の下に循環するは大靈の天地萬法を統攝するに比ぶ。太陽の能力が地上の生物を生成養育するに例すべし。

本尊觀

宗教上の己が歸命信賴するの本尊觀は其人の宗教意識の低きと高きとに依て必ずしも同一ならず。意識の幼稚なる物は神に對する觀念も隨つて低い。或は太陽を神と爲し或は高山靈池に神在りとし又は偶像を神とする如き、肉眼に映ずる自然物の中に不思議の力ありとし之を神と認めて自分の要求を遂げさせて呉るる力ある者と信賴するのである。然して其精神が高等に進むに隨つて神の觀念も亦高度である。又高等に進みたる宗教の本尊觀にも其性質同じからず。一神教と汎神教と超在一神的汎神教とである。初め一神教と云ふのは宇宙に唯一の神の存在を信じ眞の神格なるものは天に在ます獨りの父のみ。其佗一切の造られたる萬物には本々神の性存在せぬのである。唯精靈を感ずる性、神に救はるる性あるのみと。

二に汎神教は其反對に一切の衆生は悉く神性が具備して居る故に自己の靈性開顯する時は自己是神である。即ち直指人心見性成佛にて自己の佛性を開見する外に神の要なし。古佛と云ふは往昔の人が自性を發見して佛と成つたのである故其れを自己の模範とは爲すべきものの、佛の救を求めて我に於て何か爲んと。

三に超在一神的汎神教とは本有唯一の獨尊の存在を信ずると共に一切衆生は皆其大靈の分身たる靈性存するの故に之を開發すれば神と爲り得らるる。然れども唯一絕對の本佛の分子なれば亦本佛の法則と靈力とに預らざれば成佛すること能はずと。凭るやうに三種の中に於て第三の超在一神的汎神教が吾人の宗教觀の獨尊說とす。

古今賢聖が宇宙の獨尊に對する感想を擧げんに。

明治天皇の御製

例へば人爲則の中心たる主權者の如く天則の大威神者を信じて生死命あり罪禍を天に訴ふる如きは即ち宗教心である。畏くも明治天皇には「罪あらば我を咎めよ天つ神民は我身の生みし子なれば」と御製ありし如き、自己の職員天に在る事を示し禍亂あれば罪を天に負ふものとし福祉は天祐神助と爲るが如きは即ち宗教心に外ならぬ。又明治天皇の「朝な夕な御親の神に祈るなり我國民を守り給へと」宇宙獨尊なる御親なる天の御惠に依らざれば國民の除災獲福を得ざるが故に祈り玉ふのである。天子とは天の子と云ふ若し同じ人間同志ならば人が人の前に生命までも捧げて仕へることは無

理である。然るに人間を超越したる天の子たる德を有する君主なるが故に天命天惠に由て生存する人間たるもの天子の爲めに仕へ奉るのは當然である。天子も亦國民を子の如くに思召して愛撫し玉ひて國民の福利を天の御親に御祈りなさるのである。又「眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり。」神は神明不測にして肉眼にて見ることは能きぬ。凭る神聖なる神に對しては唯人の至誠心より外に感通することは不可能である。其の故は人の誠は天より賦せられたる性にて虛僞は人間の性である。人間の前には巧言令色以て欺く事も出來るが、神の前には決して通る事を得ぬ。神に對しては天眞なる至誠を以て通ずる事が能きるのである。宗教は其至誠心を發揮して神意に合一する處に生命あるのである。賢王聖主にして天神に合一するの信仰心有す。又至誠の信仰は人の精神を神とするのである。苟も人格を具する者は必ず神を信ずる性を有て居る。

孔夫子の天道

例へば水月感應の喩の如く人の心水澄む時は天の靈月感應す。孔子の如き至誠至善なる人豈神性なからんや。孔子は天道を畏れ天命に隨へと云ふ如き、天には實に誠に畏敬尊信すべき神明の存在を信じ又道德の淵源をも天道に基き人間には天命の性として天道に順ふべき樣に性情を稟けて居る故に天命の性に順ふ行が即ち道德である。天道を畏れぬ人間は人慾の私を以て自己を定めて居る故に到底凭る靠には實に道德の行るる筈はない。孔子が門人の子貢に對して天何と言はんや四時行はれ百物生ずと天何と云はんやと曰ひし意は天は言にこそ顯はさざれども其號令は草木に至る迄も及ぼして居る。春は芽ばへ夏は茂り秋は實つて冬は藏む。意識なき植物さへも天の命令に隨はざるを得ぬ自然の性を有つて居る。況んや理性あり物の眞理を識り感情あり義務を感ずべき人として天の命に順はずして可ならんやとの仰せである。又孔子は罪を天に獲る時は禱るに所なしと。例へば魯の王侯の意に觸れて魯國を追放されても齊の國に行つても生活は出來る齊國より擯斥されても亦他の國に移住する事が出來る。然れども若し天より罰せらるる時は誰にか訴へんと曰はれた。又或時匡人が孔子を襲ふ

た時に子は從容として曰く天德を予に生ず桓魋夫れ我を奈何と、桓魋は王侯である。假令王侯の尊さと雖も我は人の權威には服せぬ若し夫れ天命ならば我身は悅服すとの意である。孔子が天を重じて人權の下に屈伏せざるは蓋し天を信ずること强きが故である。凭の如くに孔子は天に人格的の神を認めて居るとは思はれぬが天道を畏れ天命に隨ふべき信仰を有つて居られた事は疑はれぬ。

教祖釋迦牟尼

我教祖釋迦牟尼は生身佛である。生身佛の釋尊は法身佛を獨一無二の尊き物として說いて居る。孔子の天に對する夫れとは大に其趣を異にして居る。孔子は自然教的に天を畏敬なされたが釋尊は唯天道を畏るる物として自然的に服從は出來ぬ。宇宙秘密藏を開きて其の日月摩尼寶王殿の金剛坐に永しへに在ます毘盧清淨身と自己と一體二身の眞理を發見せざれば止まずと云ふ如き理想に向つて突進して絕對獨尊一切眞理の源を發見された。釋尊は本王家に生れ尊きこと天子の嗣位、富四海を保ち榮耀榮花を一身に集むる程の位置に身を受け乍ら夙に生老病死の無常を悟り國と位とを棄てて山に入りて道を學びなされた。其先太子は生れつき聰明叡智にして疾く五明四吠陀等の深玄なる學に涉り、又餘の文藝射御に至る迄も學ぶに其奥に達せざるものない然れども人生問題には深く深く心意を煩はした。尙深思熟考すれば宇宙何物も無常ならざる物はない。太子の心中榮花何物ぞ有ゆる王位財寶一切物價値あるなし唯一に切望する處は生死解脫の光明のみ。竟に太子王官を出で山に入つて道を學び六年間の苦行竟に摩訶陀國の菩提道場に於て樹下石上に端坐し四十九日禪那三味に入つて竟に一夜內外十魔の競ひ起るを降伏し臘月八日の曉に無明生死の夢醒めて朗然として正覺を成し爰に於て生死の源を盡し煩惱の根を斷ち涅槃常恒の光明が現前した。此時に於て釋迦牟尼樹下に在て佛華嚴三味に入て、蓮華藏世界に盧舍那如來が無量相好無邊の光明を放ち法身大菩薩衆の爲に甚深の妙法を說くを觀じなされて居る。然れども其の時に餘の人々より見れば悉多太子が修行に疲れて樹下に趺坐して安眠する樣にのみ見ゆるならんも釋迦が瞑想中に觀ずる處の靈相は實に甚深不可思議である。

そこで釋尊の精神は全く宇宙大靈の粹なる無量光如來にある。無量光如來が即ち宇宙中心たる唯一獨尊である故に經に無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶ事能はざる所なりと。如來の光明は永しへに十方世界を照らし一切衆生斯の光に觸るる者をして淸淨と歡喜と智慧とを得せしめ不斷に光明的活動を爲さしむるが即ち釋尊の發見し玉ひし處の獨尊である。釋尊は其れを發見したまひし計りで無く其無量光が人身を以て現れ玉ふたのである。其處を孔子の如く畏敬すべき物とのみ見ずして無上の大威神力と共に無限の慈愛を以て衆生の父たり君たり最も尊く最も有難きものにまします。

獨尊たる如來は空間に徧照して遺りなきが故に無量光と號け、時間的に永恒不滅の故に無量壽と名づく。即ち一切諸佛天神の本地一切萬法の淵源に在ます。

佛敎に宇宙の宗敎とする處の大靈を號くるに數多の名號ありと雖も今は無量光如來の名を以て獨尊とす。如來は衆生の精神生活に對して心靈界の太陽である。太陽の光熱化に由て地球の萬物が生存し得る如く如來は靈界の太陽として靈的生命として大恩寵者である。

（九）

信仰の本尊

宗敎は自己が歸命信賴する所の本尊を定めて其れを自己精神の本尊と爲して此に全幅を献げて仕へ奉るのが宗敎心と云ふ。或道人の話に宗敎心の無き人の心は野中の空屋の如くである。本空屋である故何人が其屋に止宿するとも之を制止することがない。時には雨止みの爲めに通常の人が休息して居る事もあり又盗賊が宿ることもあらう。若し又佗の人が一夜の宿に困りて其屋に一夜を明さんと先に盗賊の潜み居るを知らず其内に入らんには殘酷な事に遭ふやも知れぬ如く、宗敎心の無き人の心は威神光明の主人が存在せぬ故に緣に歷れ境に對しその時々の煩惱に支配せられる。己が心に本尊の主人を迎へて之を戴くことが何より大事である。

（一〇）

（二）統　攝

大靈は宇宙の大法を以て萬物を統一攝理するを云ふ。

統攝と歸趣——一切知と一切能

獨尊統攝歸趣の三義と云ふも大靈に體が三あるのではない。獨尊なる大靈が一切萬物に對して其法則を以て能く秩序を整へ條理を爲さしむると萬物を生成する勢力とにて、言ひ換ふれば大靈の一切智と一切能との二屬性を有つて居る事にて、更に小さく人間に例して云はば知覺と運動の二性を有する人であると云ふ樣なものである。

統攝。天地萬物が行はれて自然の法則が其常規を違はず細大となく行はれゆくは萬物内存の知慧が存在するからである。例へば人間に理性があるから物の秩序が判る如く萬物中に自ら完全な理性とも云ふべき性が存在するから天體の星宿が運行するにも其秩序を失はず如何に細少な生物の生理に至る迄も自然の法則がきちんと極つてゆくのは大靈の一切知が萬物に内存する故に物のきまりが立つてゆくのである。

理性的に物の秩序を爲し條理を爲して行くが一切知なので而して一切の生物の爲めに内外の力と爲りて自らも活動し外からも力を與へて生成養育せしむるのが一切能と云ふ。是萬物が活動するの一大原動力が大靈の勢力より發現するので此勢力を以て萬物生成活動する故に萬物が其結果として終局に歸着することが出來る。一切知と一切能との二屬性が一切萬物に對して統一攝理し生成歸趣するの性能となるのである。

法は即ち理法の事にて佛敎にて法爾の理と云ひ又自然の理と云ふも同じ事にて、火は熱くして物を焚き水は潤ふて低きに流るなどの總て物理學上に說明する處、物の理法又植物の理と云へば枝葉根莖を爲す處のきまり又生物生理の榮養生殖の理法にも自然の法がきまつて居る。

眼は色を視耳は聲を聽き舌は味ひ鼻は嗅ぐ等の感覺、又苦樂を感じたり物の差別を識別し得る智慧等の心の理法も皆心理としてきまりて心の働きをなす事、唯識論杯には眼耳鼻舌身意色聲香味觸法の法から乃至百法を以て人の心理上の相を說明して居

（一一）

る。佛教で萬物には自然に眼は物を見又火は物を燒くと云ふ如き物理にても心理にても自然法爾の理と云ふ物はすべてに具有して居る事を法とも理とも名づけてある。其一切萬法の一大原則であるから法身如來とも名づくるのである。法身は萬物に其法爾自然の理を具有して萬物を各其理法に隨つて其働きを爲して攝理するのである。

人爲則と自然法

人爲法とは國家としては憲法とか又民法商法刑法杯に至る迄、夫々常規を定めて其模型の中に其の義務と權利とを定めて而して其有るべき樣に行はせる人爲法に、細かに云はば各家庭にも家憲あり家法あり又部落にも部落の規定がある、又大きく云ば萬國公法とか又は國と國との同盟規約ある如き、是等は總て人間の便利上相互に練り合うて相互の義務や權利を完全にする爲の約束である。之等を人爲法と云ふのである。自然法とは又は天則とも云ふ天然自然のきまりである。自然が造化する其巧妙なるを見よ如何に巧なる細工師にても庭に生ずる花咲き匂ふ草一本だも造ることは不可能である。又我々自分の身を以て試みてもさうである。吾自己の眼耳等の五官五臟六腑如何なる細かな處迄も實に巧妙なる器械的に不思議な機能的に出來て居る。然して其活人が種々の事を造作し思惟し發明し百般の働きを有つて居る。是誰の親の細工でもなければ自己の技巧でもない。即ち萬物内存の一切知から自然の造花となると云ふより外說明出來ぬ。故に大靈に一切智は具備して居ると云はざるを得ぬのである。自然は解剖學生理學數學等總ての文明的科學が完全に備はつて居なければならぬ樣に萬物を造作するでは無いか。自然其の物は何かは知らず人間の方より觀れば自然に一切智具備し居る樣に見ゆるのである。

因緣と因果

大靈が自然界の萬法を生成するに因果の律を以て萬法を爲す。佛教にては因緣因果の關係が萬物を成すと說く。因緣とは空間的に我と彼と相互に相扶けて大は天體にも太陽と地球との關係の如く又總ての惑星は太陽との關係を離れて獨立する事能はず。天體の一切の星宿も我彼相扶けて網の如くに空間に廣がる。之を因緣の關係と云ふ。時間的前後離るる能はざる關係に相續するを因果法と云ふ。若し之が生物界に於て雄を因とし雌を緣とし父は發生の原因にて母は養助の緣と爲る。因緣和合して子と云ふ實を結ぶ。即ち父母は因にて子は果である。子に結びたる果が追々に成長の後には又華開き果結びで子々孫々因果相續す。

此因緣は原始に一夫婦より繁殖擴張して廣く世界に蔓延し竪に子々相續して原始の規定より襲ひ傳へて因果的に相續す。此等は生物が因緣因果の理法を以て天地萬物を成す所以である。此因緣因果の理法は唯生物の生理的相續の上にばかりでなく、佛教にては神識所謂靈魂上に因緣因果の關係を說く。即ち善因善果惡因惡果と云ふ事なので、儒教等に死生命あり富貴天に在りと云ふて人の善惡運命を天分なりと說くとは異なりて人の性は善にも惡にも禍にも何れにも成り得らるる性を有つて居るので幸と不幸と凡ての運は自業自得の因果法を以て定められて居る。自己の心から善の業作を爲せば其は原因と爲りて樂しき果報を得らるる。そこで法身から受けた個々の心が善惡迷悟の發達する方面の如何に依つて凡夫聖人と三惡道の苦と三善道の樂との十界と成り得らるるものとす。夫が神識の因果法と云ふものである。

衆生法と佛法

法華經の妙法と云ふも矢張り宇宙大靈が萬物を攝理する處の理法を云ふのである。實に宇宙萬物は大靈の妙法に由て生成して居るので天地萬物何物かは妙法ならざる物やある。鳶飛んで天に至る魚の淵に躍る、天何とも云はざれども四時行はれ百物生ず是妙法である。花の紅柳の綠、法の法位に住して世間の相は常住である。

妙法の本體は卽ち一心である。衆生の一心は卽ち大靈の分子である。大靈を根底とする我等が心には本來迷悟善惡十界の性を具して居る。一心悟の光明顯はれず迷の闇に在て生死に流轉するを凡夫と云ふ。即ち衆生である。衆生が善惡の心の用い方如何に由て三善道と三惡道との六道と別るる。六道の中に種々無量の差別の相と性とに別れて種々の苦樂禍福を異て受くる是を衆生法と云ふ。即ち無明の闇に在つて生死

に流轉するのを云ふ。衆生は靈性具有して居るけれども其靈性の光が顯はれずして無明の闇に迷つて其中に貧富の別はあれども唯肉體の生活にのみ止まつて居るのを衆生法と云ふ。佛法とは人の精神が高等に發達して最終の靈性が開發して聖者の光明顯現して大靈と合一することを得るを佛法と云ふ。妙法が自ら識らず生死に有りて迷ふを衆生と云ふ。妙法を自覺して靈光覺然たるを佛法と云ふ。大靈が萬物を統攝するに衆生法を以て生物を劣等狀態より益々高等に進化せしめ衆生の心が發達して彌々靈性顯現するに至れば終局大靈と合一せしめる處の理法を佛法と云ふのである。悉く大靈の理法が一切萬有をして統攝する所以である。

小は大に下は上に統制せらるる理

大靈が一切萬物を統制するに小なる物は大なるものに、下なる物は上なるものに統制せらるる理法が存在す。今自身の中にも實に小なる一毫も數多の細分子を聚めて之を統制して而も毫と云ふ一自治體を爲して決して佗の部分とは混雜せぬ。又爪は爪て同類分子を聚合して自治體を爲し居るけれども其上の指に支配せらる。五本の指も其佗と共に合して手てふものに支配せらる。眼耳の五官胃腸等の五臟六腑四肢等の各部は各數多の細胞等を聚合して各自の一肉體を爲して居るけれども一の身體に統制せらる。各個人は各自己に統制せられて居るけれども上に一家に統制せられて居る。各家々を數多聚めて一の町村に統制せらる　各町村は幾十の數を合して縣に制せらる。各府縣は合して一の國家に統攝せらる。又各國は各自治體統制自治より萬國合して一の地球に統一せられ地球等の諸惑星は總て一の太陽系に統一せられて居る。斯の如きの小なる個體は幾千の聚合して其上なる物に統制せらる。次第に展轉して最終の統一者は宇宙全體を通じて攝理する處の絶對の大靈即ち法身ビルシヤナである。

法爾の理と云ふ事

法則の主權者。例へば人爲則に於ても國家の法則を立憲的相互に練合ふて國民の福利を得る樣に法則を立るに就ても帝王とか大統領とかの主權者を戴いて其の裁可の下

に法則に權利ある如く自然の大法則に於ても自然の大主權者が無かる可からず。こは國家爲政の範圍でなくして則ち宗教の範圍である。宗教は宇宙大自然の法則から割出して人類の精神生活を規定する性である故宇宙萬法を統攝するの大主權者即ち宗教の謂ゆる天の父、神、又如來と名くるものである。先に云ふ獨尊である。

大法を以て自己を統攝す

大靈大法を以て自分を統攝して行くのが宗教心である。云ひ換ふれば神の命令に隨順して自己の行爲をするのが宗教心である。如來は神聖である。眞理である。其神聖なる命に歸隨して自己の道德律を律するのが、即ち宗教心である。是を自の計らひを捨てて如來の勅命に隨ふと云ふのである。起信に「法性に隨順して六度を行ず」と云ふも矢張り大靈の法則に統攝せらるる事である。

如來心を以て自己の心と爲すのは即ち信仰である。已に信仰出來た上は自己は小宇宙小國家なると共に大宇宙大國家の縮少である。大宅宙に天則に依て統攝せらるる如く小我なる自己精神も又法則に隨順せねばならぬ。視よ天體の天則秩序紊さず行はれ在る如く自己の精神も靈性の太陽赫々と照臨して光明の中にすべての感情意志五官等に自己の不道德の情意を制して、如來の光明は天に太陽が赫々と照せる如く、自己心靈の光明を以て自己の動物欲感情意志等を統制して眞理の標準に向つて進み、すべての誘惑に打勝つ如きは、即ち太靈と合したる宗教心なので、又國家の政治が正法を以て國を守る時は人民も安穩に各職務に力行することを得るが、若し政なく白晝尙强盜横行すれども之を制止する事能はざる如くに小國家なる自己の精神に靈性の帝王無く之を修むること無く忿怒貪戾嫉妬貢慢懶惰等の煩惱賊が横行するも之を制止する法無き如きは即ち小國家なる人格の亡國なので即ち無宗教者と云ふのである。

佛教にて法性に隨順して波羅密を行ひ、又は波羅提木叉の光によつて自己の道德律となす如き即ち宇宙の大法を自己の道德秩序の光明として行くのが即ち大法に統攝せらるる人と云ふのである。

義務と權利

宇宙の大法を以て統攝せらるる吾人は道德上に我々は人間としての個人の義務あり責任あり之を全うする故に人間としての權利を失はぬのである。又吾人は國家の一員たる義務あり。租稅を納むる等國家に對する義務を盡してこそ國民の權利を失はぬのである。若し土地を所有するも其義務たる租稅を收めざる時は竟には其土地所有の權利を沒收せらる。夫と同樣に宇宙の大法に由つて生存する一員たる心靈の義務がある即ち是が宗教心なので宇宙の大法に隨順し眞理の光明に由て自己道德律を全うして眞理に叶ふべき行爲をなすにあり。然る時は假令胸中煩惱賊が起る事ありとも神聖なる如來光明に依て己を修め大法の命に隨うて行爲する是義務を盡すが故に大自在なる佛に成る事が出來るのである。

（一二）

（三）歸趣

子は親の本に歸る

こは大靈なる親が萬物を愛育する終局の目的なので即ち親が子に對する目的である子は親の養ひを受けて靈性開發眞善美の極即ち如來の靈界に歸着するを目的とす。

伏能と其開發

人生の主體なる我等の精神生命は生理學的に研究すれば先に述べし如く物質常恒流運の精氣即ち電子に陰陽の二氣あり之が結合して原子と爲り乃至分子が炭素化合して元形質と爲り分子が結晶して細胞と爲る。細胞が更に結合して一體と成るのが生物なので其生物は種々階級を結て人類と進化したのである。然れば元形質の生物太初の微小なる物に伏藏したる性能より總ての階級の動物と爲るべき性能が伏し居るのである

（二二）

例へば杉樹果の核は實に微小なる元形質の結合物で夫を解剖して見ても單純なる元素の結合物なれども之を沃地に播下し其培養宜しきを得る時は天を凌ぐ樣な大杉と爲る如く其大杉と成り得らるる性能は已に微粒の核内に伏して居たのである如くに原始生物の生命にも進み進みたる未來は釋尊や基督の如き世界の光明たる大聖人と成り得べき性能を伏藏して居たと云ふ事を得べきである。

手段と目的

大靈の親は天地萬物の設備を以て一切の生物を成すに、進化の終には大靈と小靈との合一すべき目的が在る樣に想はる。天地の大なる設備には生物を進化する樣に勢力を與へ生物の生命の伏能には靈的生命と成り得らるる性を藏してある。假令外部より如何に勢力を與ふるとも生物の性に高等に進化すべき性能があらざれば如何にして高等動物となり人類と爲り得る事をえん。一切の萬物悉く進化すべき勢能の具有するは矢張り其本は大靈を終局目的とする諸階級の生物と云はざる可けんや。生物の生命が劣等より益々高等に進み更に進化して人類と成りしは即ち大靈が生物界に及ぼす手段と云ふ事を得べし。人類の精神に於て原始人類は精神上の高等なる作用は未だ顯はれず唯肉體の生活に必要なる生理上の精神なる方面に發展して次第に進むに隨つて知力も感情も高等に働ける樣に成り夫等も手段にして終に靈性開發して大靈と合一し大靈の目的に隨順して靈的生命と靈的生活に進入すべきが目的であると想はる。假令世の學者は如何に云はうも宗教上より人生の目的を觀る時は凭く觀せざるを得ないわけである。

（二三）

親が子を養育する目的

總ての生物は自己を保存すると共に種族保存の目的として生殖作用を爲す。高等動物に至りては其子を愛せぬ者はない。蓋し種族的自己を保存せんとの自然の性情である。人類が其子無きを悲しみ其子を愛して全力を盡して子を養育するは即ち第二の自己を完成せん爲めの性である。親が子を養ふのは子には自己と同じく人と爲るべき性

（二四）

を遂げさせんが爲めである。子は本親より分身したる種性を有て居るから完全に性を遂げた曉には其親と同じ身となることを得る。身體追々成長の或程度親と同じ位に成る時は其が目的を達して即ち親の本に歸趣したのである。人類計りで無く總ての生物が親より分身したる種性成長の後は其親と同位に成り得る時は本に歸つたのである又身體計りではない精神の知識技藝等　於ても修行して增進せざれば其親の精神と同位置に趣る事は出來ぬ。假令其親は如何に博識强記學者たりと云ふも其子は修學力行の功を積まざれば親の知識と同位置に達することは得られぬ。故に自ら勤勉して進んで初めて親と同じ精神となる。

佛敎には一切衆生悉有佛性として各自は釋迦佛及び一切諸佛と同じ正覺の位に趣る事が得らるる性種が本來具有して居る。然れども之を修養功積み之を開發するに非ざれば其性を遂ぐる事が出來ぬ。大靈の顯はれなる如來が本願力を以て衆生を攝取すと云ふは即ち親が子に對する目的なので一切佛性ある者は皆子であるから親は慈悲と智慧とを以て子の靈性を開發して自身と同體の覺位に趣らしめたいと云ふのが本願力と云ふのである。矢張り大靈の親が衆生の靈性に對する目的である。衆生は大靈の本願力に乘じて歸命信賴して合一する時は即ち同體の覺と成る事が出來る。

大靈の目的と衆生の向上

大靈は宇宙萬有に對して終局目的が有ると云ふ說と又宇宙其物には目的あるに非ずとの說が有るけれども宇宙の一小部分とも云ふ可き地球上の一切生物が低度より高等に進みし進化の過程を見るも生物進化の極は自ら大靈と合一し得るやうに進むことに思はる。進化說等に依れば地上に始めて發したる生物はアミンバ底の物にて動物とも植物とも分ちが附かぬ位の物なれども植物は動物の食物とも成る故に植物の進化は動物に爲になり劣等動物は高等動物の犧牲となり高等動物より進化して人類となり人類も野蠻より文明に進み天然天性の生活より理性的生活となり靈性生活と進み靈性的生活に入つて大靈と合一し大靈の聖意を自己の意志として永遠の生命に入る。即ち大靈の目的が自己の目的となつて一切衆生と同一の生命として光明生活に入る。此を涅

槃と言ふ。佛敎の終局の目的は生死を超絕したる永遠の生命なる涅槃に入るにあり。

涅槃

佛敎にて大法に隨つて向上する終局を涅槃と云ふ。此の無上正覺を得て涅槃に入るを目的とす。

通じて佛敎にて人生が自己最終の奧なる靈性を開發し、大靈の目的なる大小兩靈の合一したる處即ち人類が生死の迷を超絕して絕對永遠生命に歸趣するを涅槃と云ふ涅槃とは生死生滅を超えたる永遠常住の靈界　諸〳〵の聖者の安住する處を云ふ。涅槃に入りたる精神狀態は常恒の平和と永遠の生命と一切の煩惱を寂滅したる唯幸福と光榮との光輝く處である。自然の歡喜と妙樂とに充滿せる處の故に極樂とも名づけ常恒に智慧光明の照す處の故に寂光土とも號く　無盡の莊嚴不可思議である故蓮華藏世界とも名づく。常恒不變自然の大樂自由自在淸淨微妙の靈的生命永遠不滅の故に無量壽界とも云ふ。是終局目的の歸趣する處である。

有餘涅槃と無餘涅槃

涅槃の相狀は既に論說したり。然らば爰に至るは此肉體の生命終つて然して後の未來に往生する處であるか。將た現世に於いて入らるるものかと云ふについては凭ふである。

釋尊已前の宗敎には死後の極樂を以て永遠の目的とするにあれども釋尊の發見なされた極樂は現世未來の別なく唯從來の精神生活の生死の凡夫であつた精神が一變して無明の夢醒めて光明發見したる時が此所を去らずして即ち爰に於て涅槃光明界の精神に入る事が出來る。有漏の穢身は替らねど神は淨土に栖遊ぶと云ふ精神狀態と爲るのである。其狀態を有餘涅槃と爲す。即ち此肉體を有て居ながら心が涅槃常樂の人と成つたと云ふ事である。而して彌々肉體の命終り全く心靈の光明純粹なる常樂の心狀態顯現するを無餘涅槃と云ふ。是迄は精神だけが光明界の人なれども形の上には自然の約束に依て生理上の苦惱は有つて居つたが無餘涅槃に入る時は無爲常樂の都

に入るのである。

選擇本願

大靈が衆生を終局目的に攝め入る事を宗教的に如來の本願力と云ふのであるとは已でに述べた。大靈が自己の目的に攝取するに選擇の理法がある。選擇とは衆生雜多の中から其理想に適つた物を選び取つて適せぬ物は捨てる事である。其選擇は大自然の中に一切生物にも行はれて居る。先づ生物歴史の行はれ來りし選擇の相を述べんか生物が最初劣等な動物の無數の中から正當に進んだ物は選擇せられて一階高等の動物に進化したので又無數中より正當に進んだ生物は一階進んで膓腸動物となり棘皮動物軟體動物節足、脊椎と進み、魚類となり乃至哺乳動物と進み各階級に亘つて低度より一階進む毎に一の選擇に勝利を得たものが前の動物より高等となり前の動物は糧として生存する數多の中より一級進んだものは自然選擇に及第したのである。本同一の根本より出た生物なれども正當に進みたる物が即ち人間である。亦同じ人類中に於ても正當に進みたる物は文明と爲り又個人としては賢人君子となり、完全なる發展を遂げて如來本願の力に選ばれて終局目的なる極樂涅槃常住の都に入ることが得らるる。如來の本願力に如何なる安心を以て、其の聖意に叶ふて永遠の光明に選擇攝取せらるる哉は後に述べん。

選擇せられたるもの

生物進化の階級中に過去無數の古代から生物は本劣等より漸々に進化した物であると云ふも一切の生物は悉く皆同等に各種類に於て進化する譯では無い。自然の淘汰より選ばるる物は進化し佗は矢張何程の代を經ても何萬年達ても猫は猫犬は犬である人間の精神生活に於ても、如來の本願に應じて選ばれたるは涅槃常樂に歸る事を得んも攝取せられざる物は何劫經るとも常樂の涅槃に入る事は能はぬ。然らば夫等の神識は如何に生活して居るか。是を佛敎にて衆生無明に覆はれて生死に流轉し其の善惡の業に由て三善三惡六道生死の苦を受くと爲す。是佛敎に六道輪廻說の立つ所以である。

大正十一年十一月二十五日印刷發行

編輯兼發行人　山崎辨成

東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

印刷人　秋場熊太郎

東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

印刷所　秋場印刷所

東京市小石川區水道端二丁目四十四番地

發行所　ミオヤのひかり社

振替東京四九三四八番